



発行 南区人権尊重啓発連絡会議
事務局 福岡市南区役所生涯学習推進課 (☎559-5172)

第48回福岡市人権尊重週間(12月4日~10日)
人権を尊重する市民の集い (南区会場)

参加者 309人

【講演】「いのちをみつめて〜お芝居とおはなし〜」
講師 劇団俳優座所属舞台女優 有馬 理恵さん

【実践報告】「部落差別をはじめとする人権問題に対する西日本新聞社の取り組み」
報告者 西日本新聞社 人事部 人権啓発室 渡辺 晋作さん

講演の要旨

福岡市人権尊重週間(毎年12月4日から10日まで)の行事の一つとして、12月6日(金)に南市民センターで、福岡市人権尊重行事推進委員会主催の「人権を尊重する市民の集い」が開催され、多数の方に参加していただきました。

今回の講演会は劇団俳優座所属、舞台女優の有馬理恵さんをお迎えしました。ご自身の生い立ち、「釈迦内柩唄(しゃやかないひつぎうた)」(南区特別バージョン)の一人芝居を含め、東日本大震災、差別や戦争、そして、人間の尊厳について、熱く語っていただきました。



迫力のある演技とともに、思いを熱く語る有馬 理恵さん

有馬さんの思い

1本の芝居が人間を動かし、世の中をも動かす力になると信じています。差別と戦争をなくすことに願いを込め、役者業をしています。

東日本大震災の現地写真より(東日本大震災のスライド上映から始まる)

東日本大震災当時を振り返ると、翌3月12日より捜索活動が始まります。電話もなかなかつながりません。火葬場も被災し、ご遺体もビニールに覆われたまま仮土葬されます。たくさんの子ども達が亡くなった大川小学校。福島県浪江町福島第一原発より15キロ圏内の牛小屋。牛は1か月後に全部死にました。酪農家の人々の仕事はなくなりましたが、農場の除染作業は被ばくリスクが高くてもしない訳にはいきません。

放射能の問題では、甲状腺ガンと診断された子どもが200名以上にのぼります。放射線が人体にどのような影響を及ぼすか解明しきれない中、私たちは人類存続のために、向き合っていかなければなりません。

「釈迦内柩唄」の一人芝居
「釈迦内柩唄(しゃやかないひつぎうた)」は、秋田県、釈迦内において、火葬場で仕事をする主人公が差別を受ける中、「人間はみな平等である」とを描いた水上勉の作品。

生い立ちと「釈迦内柩唄」との出会い

私は被差別地域で生まれ育ちました。両親は大恋愛の末、結婚しましたが、母は被差別地域で育った父との結婚に反対され、実家から絶縁されてしまいました。私が通う小学校の児童はすべて被差別地域の子でした。

中学生の頃、私の住んでいる地域に遊びに来た友だちが「くさい」と言うのです。そして、そのことが「差別発言だ」とされたのです。友だちが「くさい」と言ったのは、皮革産業特有の染料の臭いに対する素直な気持ちだったと思います。でも、当時の私は周囲にそのことを思うように伝えられなかったのです。このことを通して、自分の気持ちを言語化することの大切さを学びました。

高校2年の期末テスト期間中、父に連れられて、和歌山の演劇鑑賞会に行きました。「テストより大事なものが世の中にはある」という父の言葉。その劇が「釈迦内柩唄」でした。舞台には正面に人を焼く窯が3つ。秋田弁のセリフにもかかわらず、芝居が言葉を超えた瞬間を感じました。

観劇後、その強烈な衝撃から、ちょっとした引きこもりになってしまいましたが、「私も主人公のように、差別に負けずに生きたい」「私をこれまで拒否してきた祖父母にもう一度会いたい」と思うようになりました。そして、意を決し会いに行き、何とか話をすることができたのです。

【参加者の感想】

- 魂の叫びを感じました。
差別に立ち向かい、生きてこられた有馬氏の講演はとても迫力があり、説得力がありました。
「人間は人間の尊厳を否定できない」の言葉が心に深くさりました。

実践報告の要旨

新聞の役割

新聞の大事な役割は、ニュース、情報を届けることを通して地域づくりに貢献することだと思えます。そのため、新聞記者は人権感覚がとても大事です。

西日本新聞社には編集綱領があり、「あらゆる暴力・偏見を排し、人間愛と人権尊重に徹する」ことを新聞づくりの大事なルールとしています。

また、西日本新聞社と人権報道で切っても切れないものが、1980年から1981年にかけての「君よ太陽に語れ」というキャンペーン報道です。これは当時、同和問題は各新聞社がタブー視をしていた中で、西日本新聞社が差別の現状、実態を正面から取材しました。これが西日本新聞社の人権報道の大きなスタートでした。

企業の取り組み

西日本新聞社としては、2018年から福岡市企業同和問題推進協議会会長社を務めています。それをきっかけに、社内の人権尊重の取り組みを加速させるため、人権啓発室を立ち上げ、人権方針を策定しました。人権方針の前文では「同和問題をはじめとするあらゆる人権課題を正しく理解して、報道機関としての社会的責任を果たす」ことを掲げています。差別のない社会の実現に向けて人権方針を策定して、公正平等な地域社会実現の一翼を担うということを宣言しています。

この人権方針を推進していくため、人権推進委員会を作り、委員長に社長が就任することで、職場への浸透を図るようにしました。具体的な取り組みは、年2回の有識者の講演会とフィールドワークです。講演会のテーマは必ず1回は部落差別と決めています。

取り組みから1年経過して見えてきた課題は、様々な差別がある中で、なぜ必ず部落差別の研修をするのかという意見があることです。研修の狙いや目的を十分に説明できていなかったのです。部落差別をはじめさまざまな差別の根っこは同じで、無知、無理解、偏見です。部落差別解消の取り組みが、日本の人権問題の取り組みの歴史でもあり、その過程で様々な立場の方々の人権意識も高まり、様々な人権問題が見えてきたと思います。部落差別を学ばばその他の差別を見抜く力も養えると思います。だからこそ、部落差別を学ぶ必要があると、私は考えています。そして、最大の課題は今後も継続することです。人間とは忘れる生き物ですし、積み重ねが大事だと思います。



【実践報告の感想】

- 企業としてどのように人権問題に取り組んでいるのかが、具体例も交えながらの説明でよくわかりました。意識して新聞を読みます。

別の言い方をすると、企業経営のキーワードは、多様性・心理的安全性です。多様性とは、様々な立場の人が活躍できる環境ということで、心理的安全性は、自分がここにいて安心だという環境、自然体の自分でいられる環境が確保された組織ということです。この多様性、心理的安全性のある組織が企業の成長には不可欠だと言われています。

に説明できていなかったのです。部落差別をはじめさまざまな差別の根っこは同じで、無知、無理解、偏見です。部落差別解消の取り組みが、日本の人権問題の取り組みの歴史でもあり、その過程で様々な立場の方々の人権意識も高まり、様々な人権問題が見えてきたと思います。部落差別を学ばばその他の差別を見抜く力も養えると思います。だからこそ、部落差別を学ぶ必要があると、私は考えています。そして、最大の課題は今後も継続することです。人間とは忘れる生き物ですし、積み重ねが大事だと思います。企業活動をしていると、人権侵害に直面する可能性があります。差別、人権侵害は人と人との繋がりを断ち切るものです。逆に言えば、人権を大事にするということが、企業の発展につながります。企業の発展は、そこで働く従業員、地域、家庭等、周りの幸せにもつながります。そのため、企業は人権を大事にした取り組みをする必要があるのです。

南区人権を考えるつどい

令和元年9月12日(木)に開催
●南市民センター(403人が参加)

「息子よ。そのままど、ごう」

講師 神戸 かんへ 金史 さん かねぶみ

(RKB毎日放送 報道局長 兼 東京報道制作部長)

講演の要旨

神戸 金史さんは、1967年群馬県生まれ。毎日新聞社入社。放送記者を経て2005年RKB毎日放送に転職。ドキュメンタリー『うちの子』自閉症という障害を持って〜』を制作し、JNNネットワーク大賞を受賞。講演では、障がい者の人権について、ご自身の体験談を交えながら、分かりやすく話をさせていただきました。

相模原の殺傷事件

2016年の7月26日深夜、植松被告は、相模原市の障がい者施設に刃物を持って侵入し、1時間足らずの間に、職員と入所者あわせて46人を殺傷しました。この事件の本質は、特殊な男が、障がい者施設で起こした特殊な事件ではありません。世の中の役に立っていないと思われる人間は、殺害していいのかということなんです。



植松被告との面会

事件を知り、植松被告に「自閉症の障がい児の父親です。放送記者です。私と会って、なぜ事件を起こしたか話してみたくありませんか」と手紙を書きました。返ってきた手紙には、あなたは自分の子どもを「いつまで生かしておくのでしょうか」と書いてありました。

被告の彼は、まったく反省していないし、この事件を間違っていないと伝えてきたのです。この男と会って意味があるのかと思いつつ面会を重ねました。

追い詰められる母親

私には自閉症の子どもがいます。スーパーに買い物に行くと、ずっと走りまわっています。「ダメだ」といっても意味が分からず、怒り出してパニックになります。泣き叫び、ひっくり返って地面で暴れます。だけど、障がいがあるかどうかは、見ただけではわからない。そんな時、必ずといっていいほど「どうしようしつけをしているの」と言われます。私は子どもと一緒にいるときは周囲の目を気にしていましたが、妻はそれが日常でした。このように自閉症の子のお母さんは、常に厳しい目で見られています。

無理心中の事件から

当時は新聞記者として、無理心中があった時、もしかしたら自閉症の子がいる家庭があるのではないかと思い、10件近く調べてみました。事件の現場に行ったり、過去の事件を調べたり、関係者に電話したりしました。すると、調べた事件のほとんどが

自閉症の子がいる家庭でした。自閉症の子のお母さんの中には孤独の中で暮らしている方が多くいます。バスの中やスーパーで、走り回っている子どもがいて、その横にオロオロしているお母さんがいるかもしれません。その時は「たいへんですね。頑張ってますね」とひと言、声をかけてください。それだけで、その人は、かなり救われると思います。

ある時、妻が、2年前ぐらいのことを思い出して言いました。「発作的に、この子に手を出しちゃうかもしれないと思ってた」と言うのです。私は、非常に衝撃を受けました。それから、事件記者として、事件の見方が変わりました。「上っ面で見ても分からないことがあるぞ」と思いました。

認めてはいけない言葉

植松被告は、障がい者施設に勤めていました。施設の近くで育ち、ここで生活している障がい者を間近で見えてきた人です。それなのに「障がい者は生きていく資格がない」と言い出したのです。これは明らかに障がい者差別です。

ネット上に、植松被告の言葉は理解できるという人がいます。でもそれは、人として間違っていると思います。

植松被告の考えは、人権や尊厳、人間の存在さえ否定しようとするものです。そのことがいかに薄っぺらいかということはこの事件を通してこれからも考えていきたいと思っています。

【参加者の感想】

- ◎ 父親から見たリアルさ。社会の課題。とても心に響きました。
- ◎ 自閉症児を持つ親の苦労や息子さんを愛する気持ち、やさしさが伝わってきました。



地域活動の紹介 高木校区

～被災地や留学生との交流～

高木校区では、毎年夏に誰もが気軽に参加できるお祭りとして、今回で19回目となる「高木フェスタ」を開催しています。2019年は8月24日に開催し、会場の高木小学校体育館ステージでは子ども達のバレエやダンス、消防分団による和太鼓に加え、日本語学校からの留学生によるネパールの伝統的なダンスの参加もありました。また、運動場では各種団体の出店や留学生によるベトナム、ネパール料理が振る舞われていました。その中に2017年の九州北部豪雨で被災した朝倉市高木地区のブースもありました。

留学生との交流は、校区に学生寮があり、6年前に公民館事業に留学生が参加したのが始まりで、那珂川の河川清掃への協力、そして毎年「高木フェスタ」にステージ出演や飲食物の出店をすることになりました。

朝倉市高木地区とは、地区名が同じ縁で2002年から様々な行事で交流を深め、現在も高木フェスタや文化祭に出店いただいています。2017年の九州北部豪雨で甚大な被害にあった際にも出店があり、その時は義援金を贈呈しました。今回も名物のジャンボ焼鳥や夏野菜等のブースの出店がありました。地域の皆さんは1日も早い被災からの復興と末永い交流を願っています。

自治協議会の森川会長は「今後とも、校区の皆さんとともに朝倉市高木地区や留学生との交流を深め、校区の輪を広げていきたい」と話されました。



「高木フェスタ」開催当日は雨でしたが、たくさんの方が高木地区のブースに並ばれていました。

高木校区の取組に関する問い合わせ先 高木公民館 TEL: 585-1332

令和元年度「人権尊重週間」ポスター 入選作品



横手中学校 2年生 井筒 優維 さん

【編集後記】

福岡市は障がいの有無にかかわらず、すべての人が個人として尊重される社会をつくることを目指して、2019年1月1日に「福岡市障がい者差別解消条例」を施行しました。この条例が真に実現できますように公民館や人尊協などみんなで取り組んでいきましょう。